高校生が希望する働き方と進路意識との関係

～被災地の高校生の進路希望と将来不安～

○五十嵐敦

(福島大学キャリア研究部門)

キーワード：高校生・進路意識・将来展望

Relationships between what they are and what they want to be in high school students, East Japan Disaster area.

Atsushi IGARASHI

(Fukushima University, Division of Career Development Studies)

Key Words: High School Students, Career consciousness, Future Perspective

目 的

五十嵐 (2016) は、就職希望者が卒業生の3割以上の12の高校調査から、進学希望者が就職希望者に比べ職業生活やその選択に対して積極的であることを報告した。吉中ら (2003) によれば、職業知識の広がりとは高校段階では、むしろ局限化傾向が見られるという。選択肢である職業について量的な拡大よりもその特性など質的な認知が求められる。先の調査で地元地域への就職希望者は、限られた選択肢の中で受動的に折り合いをつけ、職業そのものよりも地域の人々とのつながりを求める傾向があった。では、進学校においてキャリア形成への積極さが顕著かどうかは明らかになっていない。

希望する働き方は職業名よりも雇用スタイルなどによってたずねた方が良く考える。その基盤が進路成熟 (坂柳ほか1986) であろう。このこと将来に向けての姿勢や態度に表れると考え、特に地方における基本的属性や生活のとりえ方、地域特性を踏まえた進路意識との関連を明らかにする。

方 法

1. Ss. 公立高校 (全日制普通科) の全学年 436 人 (女子 239 人, 男子 197 人)。1 年生 149 人, 2 年生 146 人, 3 年生 141 人。調査実施は、2015 年 4 月。

2. 調査内容

(1) 基本的属性…性別, 学年, 「進路」決定状況, 将来働きたい地域など質問。(2) 希望する仕事のスタイル…8つの典型的スタイルを用意し, 6件法で評定。(3) 働くこと・職業生活への不安 10 項目, 6件法。(4) 進路成熟度…坂柳ら (1986) をもとに関心性, 自律性, 計画性各 2 項目。(5) 地域の復興展望と職業生活への態度や展望。いずれも 6 件法。

結 果

1. 進路希望: 全体で「進学」希望者 367 人 (84.2%) であった。将来, 働きたいのは「東北以外」が全体で 156 人 (35.8%) であった。「地元以外」を 300 人 (69.0%) 希望, 男女や学年ではほぼ同じ状況であった。「震災の復興」については, 全体の 51.8% が不満足, 「住んでいる地域」については, 67.2% が満足と回答した。性別と学年による 2 要因分散分析の結果, 「入学」「高校生活」は 1 年生がより肯定的に受け止めていた。3. 希望する仕事のスタイル: 「公務員として働く」が各学年約 70% であった。これをもとにクラス分析を行った。C 1

(n=136) は「積極選択」群, C 2 (n=167) は未決定得点が高く, 「消極迷い」群, C 3 (n=81) は家業を継ぐ等「地元密着」群, C 4 (n=39) は公務員が高い「地域安定」群とした。4. クラスごとの進路成熟: 性と学年, クラスによる 3 要因分散分析の結果, 「関心性」「計画性」に各要因の有意な交互作用 ($F(6, 396)=2.299, p<.05$, $F(6, 396)=3.440, p<.01$) があった。学年の主効果は「計画性」「自律性」でみられ, 「関心性」では, 女子が学年とともに高まり男子では低下した。進路成熟のすべての要因でクラスターの有意な主効果が確認された。多重比較の結果, 「関心性」では C 4 が C 3 より有意に高かった。「計画性」は C 2 が他の 3 つのクラスターより有意に低い結果であった。

5. 将来不安との関連 (Fig. 1): 将来不安を目的変数として, 進路成熟度その他の要因を説明変数として重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った結果, 5 つの有意な説明変数が抽出された ($R^2=.205$, $F=28.423, p<.001$)。

考 察

高校段階では自律性と計画性を育むことが重要であることが確認された。しかし, 不安への耐性や成熟を求めるだけでは, 十分な支援とはならない。東日本大震災と原発事故による被災地においては, キャリア形成において地域社会やそこでの産業の活性化が将来展望において重要であり, より社会的な要因や文化的影響といった個人よりも広い文脈でキャリア形成の問題を論じていかなければならない (Blustein, 2014)。

Fig. 1 将来不安の有意な説明変数 (数値は β)